

夫人利生記

泉鏡花

青空文庫

瑠璃色に澄んだ中空の樹の間から、竜が円い口を張開いたよ
うな、釣鐘の影の裡で、密と、美麗な婦の——人妻の——写真を
視た時に、樹島は血が冷えるように悚然とした。……

山の根から湧いて流るる、ちよろちよろ水が、ちようどここで
堰を落ちて、湛えた底に、上の鐘楼の影が映るので、釣鐘の清水
と云うのである。

町も場末の、細い道を、たらたらと下りて、ずツと低い処から、
また山に向つて径の坂を蜒つて上る。その窪地に当るので、浅い
が谷底になっている。一方はその鐘楼を高く乗せた丘の崖で、も
う秋の末ながら雑樹が茂つて、からからと乾いた葉の中から、昼

の月も、鐘の星も映りそうだが、別に札を建てるほどの名所でもない。

居まわりの、板屋、藁屋わらやの人たちが、大根も洗えば、菜も洗う。

葱ねぎの枯葉を掻かきわ分けて、洗濯などするのである。で、竹の筧かけひを山

笹さの根に掛けて、流ながれの落口の外ほかに、小さな滝を仕掛けてある。

汲くんで飲むものはこれを飲むがよし、視ながめるものは、観みるがよし、

すなわち清水の名みょうもん聞きこが立つ。

径こみちを挟んで、水に臨んだ一方は、人の小家こいえの背戸せと畠ばたけで、大根

も葱も植えた。竹のまばら垣に藤豆の花の紫がほかほかと咲いて、

そこらをスラスラと飛交あかとんぼわす紅蜻蛉あかとんぼの羽から、……いや、その

羽に乗って、糸遊かぜろう、陽炎まぼろしという光ある幻影まぼろしが、春たけなわの闌ななるご

とく、浮いて遊ぶ。……

一時間ばかり前の事。——樹島は背戸畑の崩れた、この日当りの土手に腰を掛けて憩いつつ、——いま言う——その写真のぬししょうを正のもので見たのである。

その前に、渠かれは母の実家さとの檀那寺だんなでらなる、この辺あたりの寺に墓はかまい詣もりした。

俗に赤門寺と云う。……門も朱塗だし、金剛神を安置した右左の像が丹にであるから、いずれにも通じて呼ぶのであろう。住職も智識の聞えがあつて、寺は名高い。

仁王門の柱に、大草鞋おおわらじが——中には立った大人の胸ぐらいな

のがある——かさな重つて、稲束の木乃伊みいらのように掛かつてゐる事は、渠かれが小児こどもの時に見知つたのも、今もかわりはない。緒に結んだ状さまに、小菊まじりに、俗に坊さん花というのを挿して供えたのが——あやめ草あしに結ばむ——「奥の細道」の趣があつて、すこやか健なる神の、草鞋を飾る花たばと見ゆるまで、日に輝きつつも、何となく旅情を催させて、故郷ふるさとなれば可懷なつかしさも身に沁しみる。

峰の松風が遠く静しずかに聞えた。

くり庫裡おとすに音信れて、お墓経をと頼むと、気軽に取次がれた住職が、納所なつしよとも小僧ともいわず、すぐに下駄ばきで卵塔場へ出向わる。

かあかあと、鴉からすが鳴く。……墓所はかしよは日陰である。苔こけに惑い、

露に^{すべ}に^あつて、樹島がやや慌^{あわ}しかつたのは、余り身輕に和尚どのが、
 すぐに先へ立つて出られたので、十八九年不沙汰^{ぶさた}した、塔婆の中
 の草徑^{くさみち}を、志す石碑に迷つたからであつた。

紫袂^{ふくさ}紗の輪鉦^{りん}を片手に、

「誰方^{どなた}の墓であらつしやるかの。」

少々極^{きまり}が悪く、……姓を言つと、

「おお、いま立つていさつしやるのが、それじやがの。」

「御不沙汰をいたして済みません。」

黙^うつて俯向^{うつむ}いて線香を供えた。細い煙が、裏すいて乱るるばかり、墓の落葉^{うずたか}は堆^{うずたか}い。湿つた青苔^{ろうそく}に蠟燭^{さき}が刺つて、揺れもせず、
 燐寸^{マッチ}でうつした灯がまっ直^{すぐ}に白く昇^たつた。

チーン、チーン。——かあかあ——と鴉が鳴く。

やがて、どくじゆ読誦の声を留めて、

「お志の御回向えこうはの。」

「一同にどうぞ。」

「先祖代々の諸精靈……願がん以此功德無量いしくどくむりようだん壇波羅蜜。具ぐ足円満、

平等利益——南無妙なむみよう……此經難持しきようなんじ、若暫持、我即歡喜がそくかんぎ

……一切天人皆応供養。——」

チーン。

「ありがとうございます。」

「はいはい。」

「御苦勞様でございました。」

「はい。」

と、袖そでに取った輪鉦形りんなりに肱ひじをあげて、打傾きざまに、墓参の男じつみを熟と視て、

「多くは故人になられたり、他国をなすつたり、久しく、御墓参の方もありません。……あんたは御縁辺であらうしやるかの。」

「お上人様。」

裾すそ冷く、鼻じろんだ顔を上げて、

「——母の父ふたおや母、兄などが、こちらにお世話になっております。」

「おお、」と片足、胸とともに引いて、見直して、

「これは樹島の御子息かい。——それとなくおたよりは聞いてお

ります。何よりも御機嫌での。」

「御僧様こそ。」
あなたださま

「いや、もう年を取りました。知人は皆二代、また孫の代じや。」
しりびと

……しかし立派に御成人じやな。」

「お恥かしゆう存じます。」

「久しぶりじや、ちと庫裡へ。」
あれ——渋茶など進ぜよう。」

「かさねまして、いずれ伺いますが、旅さきの事でございますし、それに御近所に参詣をした_{おまいり}い処もございますから。」

「ああ、まだお娘御のように見えた、若い母さんに手を曳かれて
お参りなされた、——あの、摩耶夫人の御寺へかの。」
まやぶにん

なき、その母に手を曳かれて、小さな身体は、春秋の蝶々蜻
からだ
はるあき

蛉に乗ったであろう。夢のように覚えている。

「それはそれは。」

うなず
と頷いて、

「また、今のほどは、御丁寧に——早速御仏前へお料具を申そう。

——御子息、それならば、お静しずかに。……ああ、上のその木戸はの、

錠、鍵も、がさがさと壊れています。開けたままで宜よろしい。あと

で寺男おとこが直しますでの。石段が欠けて草蓬ぼうぼう々じや、堂前へ上ら

つしやるに気を着けなされよ。」

この卵塔は窪地である。

石を四五壇、せまり伏す枯尾花ねずみに鼠ねずみの法衣ころもの隠れた時、ばさりと

と音して、塔婆近い枝に、山鴉が下りた。葉がくれてんぐに天狗の枕の

ように見える。蠟燭ろうそくを啄つもうとして、人の立去るのを待つのである。

衝つと銜くわえると、大概是山へ飛ぶから間ま違ちがはないのだが、怪我けがに屋根へ落すと、草葺くさぶきが多いから過失あやまちをしでかすことがある。樹島は心得て吹消した。線香の煙の中へ、色を淡うすく分けてスツと蠟燭の香が立つと、かあかあと堪たまらなそうに鳴立てる。羽音もきこえて、声の若いのは、仔鳥こがらすらしい。

「……お食あがり。」

それも供養になると聞く。ここにも一羽、とおなじような色の外套がいとうに、洋傘ようもりを抱いて、ぬいだ中折帽なかおれを持添えたまま葎むぐらの中を出たのであった。

赤門寺に限らない。あるいは丘に、坂、谷に、こみち径を縫う右左、
 町家まちやが二三軒ずつ門前にあるばかりで、ほとんど寺つづきだと言
 つても可い。赤門には清正公が祭つてある。北辰ほくしん妙見みょうけんの宮、
 摩利支天みどうの御堂、弁財天の祠には名木の紅梅の枝垂れしだつつ咲くの
 がある。明星の丘の毘沙門びしゃもん天。虫歯封じに箸はしを供うる辻の坂の
 地蔵菩薩じぞうぼさつ。時雨の如意輪觀世音。笠守かさもりの神。日中も梟ひなかが鳴くと
 いう森の奥の虚空藏堂。――

清水みづらの真空の高い丘に、鐘楼を営んだのは、寺号は別にあるう、
 皆梅鉢寺と覚えている。石段を攀よじた境内の桜のもと、分けて鐘
 楼いしずえの礎のあたりには、高山植物として、こうした町近くにはほと
 んどみだされないと称となうる処の、梅鉢草が不思議に咲く。と言伝

えて、申すまでもなく、学者が見ても、ただ心ある大人が見ても、類は違うであろうけれども、五弁の小さな白い花を摘んで、小児^{こども}たちは嬉しがったものである。——もつとも十ぐら^{とお}いまでの小児が、家からここへ来るのには、お弁当が^{いりよう}入用だった。——それだけに思出がなお深い。

いま咲く草ではないけれども、土の香を親しんで。……樹島は赤門寺を出てから、仁王尊の大草鞋^{おおわらじ}を船にして、寺々の巷^{ちまた}を漕ぐように、秋日和の巡礼街道。——一度この鐘楼に上ったのであったが、攀^よじるに急だし、汗には且つなる、地内はいずれ仏神の^{すいじやく}垂跡に面して身がしまる。

旅のつかれも、ともに、^{ほっ}吻と一息したのが、いま清水に向った

大根畑の縁へりであつた。

……遅ひるめの午飯に、——湯で漁とれる——わかさぎを焼く香においが、

淡く遠くから匂つて来た。暖か過ぎるが雨にはなるまい。赤蜻蛉の羽も、もみじを散ちらして、青空に透通る。鐘は高く竜頭りゅうずに薄霧を捲まいて掛かつた。

清水から一坂上り口に、薪まき、漬おけもの桶、石臼いしうすなんどを投遣なげやりにした物置の破納屋やれなやが、炭焼小屋に見えるまで、あたりは静しずかに、人の往来ゆききはまるでない。

月の夜よはこの納屋の屋根から霜になるであらう。その石臼すがに縫すがつて、嫁菜の咲いたも可哀あわれである。

ああ、桶の箍たがに尾花が乱る。この麗うらちかさにも秋の寂しさ……

樹島は歌も句も思わずに、畑の土を、外がいとう套の背にずりすべ込つて、半ば寝つつも、金剛神の草鞋わらじに乗った心持に恍うっとり惚した。

ふと鳥影が……影が翳さした。そこに、つい目の前さきに、しなやか

な婦おんなが立った。何、……紡績らしい緋かすりの一枚着に、めりんす友染

と、縹しゆす子の幅狭はばぜまな帯をお太鼓に、上から紐ひもでしめて、褪あせた桃

色の襷たすき掛け……などと言うより、腕かいあらわ露呈に、肱ひじを一杯に張つて、

片脇たらいに盥たらを抱えた……と言う方が早い。洗濯をしに来たのである。

道端の細ほそながれ流で洗濯をするのに、なよやかなどと言う姿はない。

——ないのだが、見ただけでなよやかで、盥たらに力を入れた手が、

霞を溶いたように見えた。白やかな膚はだを徹とおして、骨まで美しいの

であろう。しかも、素足に冷めし草履はを穿はいていた。近づくのに、

音のしなかつたのも頷うなずかれる。

おんな
婦は、水ぎわに立停たちどまると、洗濯盥——盥には道草に手打たった

らしい、嫁菜が一束挿してあつた——それを石の上へこごみ腰に
おろすと、すつと柳に立直つた。日あたりを除よけて来て、且つ汗
ばんだらしい、姉あねさん被かぶりの手拭てぬぐいを取つて、額えりよりは頸脚あしを
軽く拭ふいた。やや俯向うつむけになつた頸うなじは雪を欺く。……手拭を口に
銜くわえた時、それとはなしに、面おもてを人うちに打蔽おおう風情が見えつつ、
眉を優しく、斜ななめだちの横顔、瞳めづめの濡ぬれぬれ々と黒目がちなのが、ちら
りと樹島に移つたようである。颯さつと睫毛まつげを濃く俯目ふしめになつて、頸えり
のおくれ毛を肱うで白く搔上げた。——漆にちらめく雪の蒔絵まきえの指さ
きの沈むまで、黒く房ふっさりした髪を、耳みみ許もと清く引詰ひつめて櫛くし巻まきに

結っていた。年紀は二十五六である。すぐに、手拭を帯に挟んで——岸からすぐに俯向くには、手を差伸しても、流は低い。石段が出来ている。苔も草も露を引いて皆青い。それを下りさまに、ふと猶予つたように見えた。ああ、これは心ないと、見ているものの心着く時、褻を取つて高く端折つた。婦は誰も長襦袢を着ているとは限らない。ただ一重の布も、膝の下までは蔽わないで、小股をしめて、色薄く縊りつつ、太脛が白く滑かにすらりと長く流に立つた。

ひたひたと絡る水とともに、ちらちらと紅に目を遮つたのは、倒に映るといふ釣鐘の竜の炎でない。脱棄てた草履に早く戯るる一羽の赤蜻蛉の影でない。崖のくずれを雑樹また藪の中に、月夜

の骸骨がいこつのように朽乱れた古卒堵婆ふるそとばのあちこちに、燃えつつ曼まんじ珠沙華ゆしやげが咲残ったのであつた。

おんな
婦は人間離れをして麗うつくしい。

この時、久米の仙人を思出して、苦笑をしないものは、われらの中に多くはあるまい。

仁王の草鞋の船を落ちて、樹島は腰の土を払って立つた。面つらはいつの間にか伸びている。

「失礼ですが、ちよつと伺います——旅のものです。」

「は、」

蓮行寺れんぎようじと申しますのは？」

「摩耶夫人様のお寺でございますね。」

その声にきけば、一層奥ゆかしくなおうといとうりてん切利天の貴女の、さながらの御かしずきおんに対して、渠かれは思わず一礼した。

おんな婦はちようどかけひ笕の水に、嫁菜の莖を手すさびに浸していた。浅あ葱さぎしずくに雫する花をたて楯に、破納屋やれなやの上のぼりみち路を指して、

「その坂をなぞえにお上りなさいますと、——戸がしまっており
ますが、二階家が見えましょう。——ね、その奥に、あの黒く茂
りましたのが、虚空蔵様のお寺でございます。ちようどその前の
処が、青くあかる明くなって、ちらちらもみじが見えますわね……あす
こが摩耶夫人様でございます。」

「どうもありがとう——尋ねたいにも人通りがないので困ってい
ました。——お底様かげさまで……」

「いいえ……まあ。」

「御免なさい。」

「お静^{しずか}におまいりをなさいます……御利益がございますわ。」

と、嫁菜の花を口^{くちもと}許^{まぶた}に、瞼^{まぶた}をほんのり莞爾^{にっこり}した。

——この婦人^{おんな}の写真なのである。

写真は、蓮行寺の摩耶夫人の御堂^{みどう}の壇の片隅に、千枚の歌留多^{かるた}を乱して積んだような写真の中から見出^{みいだ}された。たとえば千枚千人の婦女が、一人ずつ皆嬰兒^{あかご}を抱いている。お産の祈願をしたものが、礼詣りに供うるので、すなわち活きたままの絵馬である。胸に抱いたのも、膝に据えたのも、中には背に負^{おんぶ}したまま、両の

掌^てを合せたのもある。が、胸をはだけたり、乳房を含ませたりしたのは、さすがにないから、何も蔽^{おほ}わず、写真はあからさまになつてゐる。しかし、婦^{おんな}ばかりの心だしなみで、いずれも伏せてある事は言うまでもない。

この写真が、いま言つた百人一首の歌留多のように見えるまで、御堂は、金碧^{きんぺきそうぜん}蒼然としつつ、漆と朱の光を沈めて、月影に青^{にしき}い錦を見るばかり、嚴^{おごそか}に端しく、清らかである。

御厨子^{みずし}の前は、縦に二十間がほど、五壇に組んで、紅^{くれなは}の袴、白^び衣^{やくえ}の官女、烏帽子^{えぼし}、素袍^{すおう}の五人囃子^{ばやし}のな^ないばかり、きらびやかなる調度を、黒棚よりして、膳部^{ぜんぶ}、轅^{ながえ}の車まで、金高^{きんたか}蒔^ま絵、青^{あお}貝^{かい}を鏤^{ちりば}めて隙間なく並べた雛壇^{ひなだん}に較べて可^いい。ただ緋毛氈^{ひもうせん}の

かわりに、敷妙しきたえの錦である。

ことごとく、これは土地の大名、城内の縉紳しんしん、豪族、富商の

奥よりして供えたものだと聞く。家々の紋づくしと見れば可い。

天人の舞樂、合天井の紫のなかば、古錦欄こきんらんの天蓋てんがいの影に、

黒塗に千羽鶴の蒔絵をした壇を据えて、紅白、一つおきに布を積

んで、媚なまめかしく堆うずたかい。皆新しい腹帯である。志して詣もつでた日に、

折からその紅くれなゐの時は女の児こ、白い時は男の児が産れると伝えて、

順を乱すことをしないで受けるのである。

右左おおきに大な花瓶が据すわつて、ここらあたり、花屋およそ五七軒は、

圀かこいの穴蔵を払ったかと思われる見事な花が夥おびただ多しい。白菊黄菊、

大輪の中に、桔梗ききようがまじつて、女郎花おみなえしのまだ枯れないのは、

功德の水の恵であろう、末葉うらはも落ちず露がしたたる。

時に、腹帯は紅であつた。

渠かれが詣でた時、蠟燭ろうそくが二挺灯ちよちもつて、その腹帯台かたわらの傍に、老女

が一人、若い円髻まるまげの和睦むつまじそうに拝んでいた。

しばらくして、戸口でまた珠数を揉も頂みただいて、老女さきが前に、

その二人が歸つたあとは、本堂、脇堂にも誰も居ない。

ここに註ちゆうしておく。都会にはない事である。このあたりの寺は、

どこにも、へだて、戸じまりを置かないから、朝づとめよりして

夕暮までは、諸天、諸仏。——中にも爾しかく端麗なる貴女の奥殿に

伺候しこうするに、門番、諸侍の面倒はいささかもないことを。

寺は法華宗である。

祖師堂は典正なのが同一棟ひとつむねに別にあつて、幽巖なる夫人ぶにんびようの廟よりその御堂みどうへ、細長い古畳が欄間の黒い虹にじを引いて続いている。……広い廊下は、霜のように冷つめうして、虚空蔵の森をうけて寂じやく然ねんとしていた。

風すかしに細く開いた琴柱窓ことじまどの一つから、森を離れて、松の樹の姿のいい、赤土山の峰が見えて、色が秋の日に白いのに、向む越この山の根に、きらきらと一面の姿見の光るのは、遠い湖の一部である。此方こなたの麓ふもとに薄もみじした中腹ゆるめぐを弛ゆるく繞めぐつて、巳みの字の形に一つ蜒うねつた青い水は、町中を流るる川である。町の上には霧が掛かつた。その霧を抽ぬいて、青天に聳そびえたのは昔の城の天守である。

聞け——時に、この虹の欄間に掛けならべた、押絵の有名な額がある。——いま天守を叙した、その城の奥々の婦人たちが丹誠を凝した細工である。

万亭応賀の作、豊国画。錦重堂板の草双紙、——その頃江戸で出版して、文庫蔵が建つたと伝うるまで世に行われた、釈迦八相倭文庫の挿画のうち、摩耶夫人の御ありさまを、絵のまま羽二重と、友染と、綾、錦、また珊瑚をさえ鏤めて肉置の押絵にした。……

浄飯王が狩の道にて——天竺、天臂城なる豪貴の長者、善覚の妹姫が、姉君矯曇弥とともに、はじめて見ゆる処より、優陀夷が結納の使者に立つ処、のちに、矯曇弥が嫉妬の処。やが

て夫人が、一度、幻に未生のうない子を、病中のいためる御
 胸に、抱きしめたまう姿は、見る目にも痛ましい。その肩にた
 れつつ、みどり児の頸を蔽う優しき黒髪は、いかなる女子のか、
 活髪をそのままに植えてある。……

われら町人の爺媼の風説であろうが、矯曇弥の呪詛の押絵は、
 城中の奥のうち、御台、正室ではなく、かえつて当時の、側室、
 愛妾の手に成ったのだと言うのである。しかも、その側室は、
 絵をよくして、押絵の面描は皆その彩筆に成ったのだと聞くの
 も意味がある。

夫人の姿像のうちには、胸ややあらわに、あかんぼのお釈迦様
 を抱かるるのがあるから、——憚りつつも謹んで説おう。

ここの押絵のうちに、夫人が姿見のもとに、黒塗の蒔絵の盥たらいを取つて手ちようず水を引かるる一面がある。真珠を雪に包んだような、白羽二重で、膚はだぬぎ脱おんちの御乳のあたりを装もつてある。肩も背も半身はだえの膚あらわにおわする。

牙きばの六つある 大白象だいびやくぞうの背に騎して、兜率天とそつてんよりして雲を

下つて、白衣の夫人の寝姿の夢まくらに立たせたまう一枚のと、一面やや大なる額に、かの藍毘尼園中らんぴにおんちゆう、池に青せいしよく色の蓮華れんげの開く処。無憂樹むうじゆの花、色香鮮麗せんれいにして、夫人が無憂の花にかざしたる右の手のその袖のまま、釈尊降誕の一面とは、ともに城の正室の細工だそうである。

面影も、色も鬢たなび鬢たなびいて、欄間の雲に浮出づる。影はささぬが、

香にこぼれて、後にひかえつつも、畳の足はおのずから爪立たれた。
つまだ

畳廊下を引返しざまに、敷居を出る。……夫人廟ぶにんびようの壇の端に、
 その写真の数々が重ねてあつた。

押絵のあとに、時代を違えた、写真を覗くのぞのも学問である。

清水に洗濯した美女の写真は、ただその四五枚めに早く目に着いた。
まるまげ円髻どりごにこそ結ったが、羽織も着ないで、女の児こらしい嬰み児を抱いて、写真屋の椅子にかけた像は、寸分の違いもない。
かたち

こうした写真は、公開したもおなじである。産の安らかさに、
 児のすこやかさに、いずれ願ほどこにあやかするため、その一枚を選んで
 借りて、ひそかに持帰る事を許されている。ただし遅速はお

いて、複写して、夫人の御人々御中に返したてまつるべき事は言うまでもなからう。

今日は方々にお賽銭が多い。道中の心得に、新しく調えた懷中に半紙があつた。

目の露したたり、口許も綻びそうな、写真を取つて、思わず、
四辺あたりを見て半紙に包もうとした。

トタンに人氣ひとけはい勢がした。

樹島はバツとあかくなつた。

猛然として憶起おもいおこした事がある。八歳やっつか、九歳ここのつの頃である

う。雛人形ひなにんぎょうは活いきている。雛市は弥生やよいばかり、たとえば古道

具屋の店に、その姿があるとする。……心を籠こめて、じつと凝視みつめ

るのを、毎日のように、およそ七日十日に及ぶと、思入ったその雛、その人形は、莞爾にっこりと笑うというのを聞いた。——時候は覚えていない。小学校へ通う大川の橋一つ越えた町の中に、古道具屋が一軒、店に大形の女雛めびなばかりが一体あつた。藹長ろうたけた美しさは註するに及ぶまい。——樹島は学校のかえりに極きまつて、半時ばかりずつ熟じつと凝視した。

目は、三日四日めから、もう動くようであつた。最後に、その唇の、幽冥ゆうめいの境より霞一重に暖かいように莞爾にっこりした時、小児こどもはわなわなと手足が震えた。同時である。中仕切の暖簾のれんを上げて、姉さんだか、小母さんだか、綺麗きれいな、容子ようすのいいのが、すつと出て来て、「坊ちゃん、あげましよう。」と云つて、待て……その

雛ではない。定紋つきの塗長持の上に据えた緋ひの袴はかまの雛のわきな
 る柱に、矢をさした鞞うつぼと、細長い瓢ひょうたん箆へらと、靈芝れいしのようなもの
 と一所に掛けてあつた、——さ、これが変だ。のちに思つても可ふ
 思議しぎなのだが、……くれたものというほつすと払子ほつすに似ている、木の柄
 が、草石蚕ちやうろぎのように巻きぼりして、蝦えび色いろに塗つてあるさきの
 処に、一尺ばかり革の紐がばらりと一束ついている。絵で見た大
 将が持つ采配さいはいを略したような、何にするものだか、今もつて解わか
 らない。が、町々辻々に、小児こどもという小児が、皆おもちゃを持っ
 て、振つたり、廻したり、空くうを払はたいたりして飛廻つた。半年ばか
 りですたれたが、一種の物妖ぶつようと称とえて可よかろう。持たないと、
 生効いきがいのないほど欲しかった。が樹島にはそれがなかった。それ

を、夢のように与えられたのである。

橋の上を振廻して、空を切つて駈かけ戻もどった。が、考えると、：

ばけほつす

：化ばけ払子に尾が生えつつ、宙を飛んで追おっか駈かけたと言わねばならない。母のなくなった、一周忌の年であつた。

父は児この手の化ものを見ると青くなつて震えた。小遣錢をなまで持たせないその児の、ぬすみごころ盗心ぬすみごころを疑つて、怒つたよりは恐れたのである。

真偽を道具屋にたしかめるために、祖母がついて、大橋を渡る半ばで、母のおくつきのある山の峰を、孫のために拝んだ、小児こどもも小さな両手を合せた。この時の流ながの音おとの可おそろし恐おそろしさは大地が裂けるようであつた。「ああ、そうとは知りませぬ。——小児衆の頑

はない、欲しいものは欲しかろうと思うて進めました。……毎日
 見てござったは雛じやったか。——それはそれは。……この雛は
 ちと大金たいまいのものゆえに、進上は申されぬ——お邪魔でなくばそ
 の玩弄品おもちゃは。」と、確しかと祖母に向つて、道具屋が言つてくれた。
 が、しかし、その時は綺麗な姉さんでも小母さんでもない。不
 精髯しょうひげの胡麻塩ごましおの親仁おやしであつた。と、ばけものは、人の慾よくに憑つ
 て邪心を追つて来たので、優やさしい婦ひとは幻影まぼろしばかり。道具屋は、稚
 いのを憐あわれがって、嘘で庇かばつてくれたのであらうも知れない。――
 思出すたびに空恐ろしい氣がいつもする。

——おなじ思おもが胸を打った。同時であつた、——人ひと氣勢けはいがし
 た。――

御廟子みづしの裏へ通う板廊下の正面の、簾すだれすかしの観音びらきの扉と

が半ば開きつつ薄うすあかる明ななめい。……それを斜ななめにさし覗のぞいた、半身の

気高い婦人がある。白衣に緋を重ねた姿だと思えば、通夜の籠こもり

堂どうに居合せた女によしやう性せいであろう。小紋の小袖に丸帯と思えば、

寺には、よき人の嫁ぐならいがある。——あとで思うとそれも臍おぼろ

である。あの、幻の道具屋の、綺麗な婦ひとのようでもあつたし、襦う

襦ちかけすがたふりそで姿振袖の額の押絵の一体のようにも思う。……

瞬間には、ただ見られたと思う心を、棒にして、前後も左右も

顧みず、衝々つつと出、その裳もすそに両手をついて跪ひざまずいた。

「小児は影法師も授さずかりません。……ただあやかりとう存じます。

——写真は……拝借出来るのでございましょうか。」

舌はここで爛ただれても、よその女を恋うるとは言えなかったのである。

「どの、お写真。」

と朗ほがらかに、しつとり聞えた。およそ、妙たえなるものごしとは、この時言うべき詞ことばであつた。

「は、」

と載せたまま白紙しらかみを。

「お持ちなさいまし。」

あなたの手で、スツと微かすかな、……二つに折れた半紙の音。

「は、は。」

と額に押頂くと、得ならず艶えんなるものの薫かおりに、魂くうは空になりな

がら、恐怖おそれと恥はじとに、渠かれは、ずるずると膝さかで退さがつた。

よろりと立つ時、うしろ姿がすつと隠れた。

外套も帽も引ひ拵つつかんで、階きざはしを下りる、足すべが迂る。そこへ身体からだごと

と包むような、金剛神の草鞋わらじの影が、髻ほうふつ髻ふつとして頭あれなかつた

ら、渠は、この山寺の石の壇こみちを、徑ころへ転落げおちたに相違ない。

雛ほほえみの微笑ほほえみさえ、蒼穹あおぞらに、目うかに浮んだ。金剛神の大草鞋は、

宙を踏んで、渠を坂道へ櫓そり落した。

清水むこうはたの向むこうはた 畠なえなえのくずれ土手へ、萎なえなえ々々となつて腰を支ついた。

前刻おんなの婦おんなは、勿論の事、もう居ない。が、まだいくらほどの時も

経たたぬと見えて、人の来て汲くむものも、菜を洗うものもなかつた

のである。

ほかほかとおなじ日向ひなたに、藤豆の花が目を円く渠を見た。……あの草履なぶをうらやま蹴つたのが羨しい……赤蜻蛉が笑っている。

「見せようか。」

あおむ

仰向けに、鐘を見つつ、そこをちらちらする蜻蛉に向つて、あおむ自棄けに言つた。

「いや、……自分で拝もう。」

時に青空に霧をかけた釣鐘が、たちまち黒く頭上を蔽うて、破やれなや納屋まなこの石臼も眼が窪み口が欠けて、髑髏しやりこうべのように見え、曼珠まんじゆ沙華しやげも鬼火に燃えて、四辺あたりが真暗まつくらになつたのは、眩めくるめく心地がしたからである。——いかに、いかに、写真が歴々ありありと胸に抱いていた、毛糸帽子、麻の葉鹿の子のむつぎの嬰兒あかんぼが、美女の袖を

消えて、拭^{ぬぐ}つて除^とつたように、なくなっていたのであるから。

樹島はほとんど目をつむつて、まじぐらに摩耶夫人の御堂に駈^か戻^{けもど}つた。あえて目をつむつてと言う、金剛神の草鞋が、彼奴^{きやつ}の尻をたたき戻した事は言うまでもない。

夫人の壇に戻し参らせた時は、伏せたままでソと置いた。嬰^{あかん}児^ぼが、再び写真に戻ったかどうかは、疑うだけの勇氣はなかったそうである。

「いや、何といたしまして。……棚に、そこにござります。金、極彩色の、……は、そちらの素木彫^{しらきぼり}の。……いや、何といたして、古人の名作。ど、ど、どれも諸家様の御秘蔵にござりますが、

少々ずつ修覆をいたす処がありまして、お預り申しておりますので。——はい、店口にござります、その紫の袈裟けさを召したのは私てまえが刻みました。祖師のお像すがたでござりますが、喜撰法師のように見えます処が、業わざの至りませぬ、不束ふつつかゆえで。」

と、淳朴じゆんぽくな仏師が、やや呐どもつて口重く、まじりと言う。

しかしこれは、工人の器量を試みようとして、棚の壇に飾った仏体こころみに対して試に聞いたのではない。もうこの時は、樹島は既に摩耶夫人の像を依頼したあとだったのである。

一山に寺々を構えた、その一谷ひとたにを町口へ出はずれの窮路、陋ろ巷うこうといつた細小路で、むれるような湿気のかびの一杯に臭におう中に、芬ぶんと白檀びやくだんの薰かおりが立った。小さな仏師の家であつた。

ひとこまがらす
 一小間硝子を張つて、小形の仏龕、塔のうつし、その祖師の
 像^{かたち}などを並べた下に、年紀^{としごろ}はまだ若そうだが、額のぬけ上った、
 そして円顔で、眉の濃い、目の柔和な男が、道の向うさがりに大
 きな塵塚^{ちりづか}に対しつつ、口をへの字形^{なり}に結んで泰然として、胡坐^{あぐら}
 で細工盤に向つていた。「少々拝見を、」と云つて、樹島は静^{しずか}に
 土間へ入つて、——あとで聞いた預りものだという仏、菩薩^{ぼさつ}の種^{すがた}
 々相を礼しつつ、「ただ試みに承りたい。大^{おおき}なこのくらいの像^{わびずま}を
 一体は。」とおおよその値段を当つた。——冷々とした侘住
 居^いである。木綿縞^{もめんしま}の膝掛^{ひざかけ}を払つて、筒袖のどんつくを着た
 膝^{すわ}を居り直つて、それから挨拶した。そツときいて、……内心恐
 れた工料の、心づもりよりは五分の一だったのに勢^{いきおい}を得て、すぐ

に一体を誂あつらえたのであった。――

「……なれども、おみだしに預りました御註文……別して東京へお持ちになります事で、なりたけ、丹、丹精を抽ぬきんでまして。」

と吃どもつて言う。

「あなた、仏様に御丹精は、それは実に結構ですが、お礼がお礼なんですから、お骨折ではかえつて恐縮です。……それに、……唯ただいま今も申しました通り、然るべき仏壇の用意ありません。勿体なくありません限り、床の間か、戸袋の上へもお据え申そうと思いますから、かたがた草双紙風俗ふうにとお願い申したほどなんです。――本式ではありません。忉利天とうりてんのお姿では勿体ないと思うのですから。……お心安く願います。」

「はい、一応は心得ましてござります。なお念のために伺いますが、それでは、むかし御殿のお姫様、奥方のお姿でござりますな。」

「草双紙の絵ですよ。本があると都合がいいな。」

樹島は まきたばこ 巻 莨 を吸いさして打案じつつ、

やまとぶんこ 「倭文庫。……」

「え、え、釈迦八相——師匠の家にございまして、てまえ 私よく見まして存じております。いや、どうも。……」

と胸を抱くように腕を拱くんで、

「小僧から仕立てられました、……その師匠に、三年あとになくなられましたな。杖とも柱とも頼みましたものを、とんと途方に

暮れております。やっと昨年、真似方まねかたの細工場を持ちました。ほんの新店でござります。」

「もし、」

と、仕切一つ、薄暗い納戸から、優しい女の声でした。

「端本はほんになりましたけれど、五六冊ございましたよ。」

「おお、そうか。」

「いや、いまお捜しには及びません。」

様子を察して樹島かまちが框から声を掛けた。

「は、つい。」

「お乳っぱ。」

と可愛い小児こどもの声する。……

「めめ、覚えて。はい……お乳あげましょうね。」

「のの様、おっぱい。……のの様、おっぱい。」

「まあ、のの様ではありません、母かあちゃんよ。」

「ううん、欲ほしくないの、坊、のんだの、のの様のおっぱい。――

お雛ひなちゃん様のような、のの様のおっぱい。」

「おや、夢を御覧だね。」

樹島は肩の震うばかり胸にこたえた。

「嬢ちゃんですか。」

「ええ、もう、年弱としよわの三歳みっつになりますが、ええ、もう、はや――

――ああ、何、お茶一つ上げんかい。」

と、茶卓ちゃくに注いで出した。

「あ、」

清水にきぬ洗える美女である。先刻さつきのままで、洗いさらした銘め

いせん
仙の半纏はんてんを引掛ひっかけた。

「先刻は。」

「まあ、あなた。」

「お目にかかったか。」

「ええ、梅鉢寺の清水の処で、——あの、摩耶夫人様のお寺をお
ききなさいました。」

渠かれは冷い汗を流した。知らずに聞いた路なのではなかったの
で。
ある。

「御信心でございますわね。」

と、熟^{じつ}と見た目を、俯^{ふしめ}目にぽつと染めた。

むつくりとした膝^たを敲^{たた}いて、

「それは御縁^{ごゑん}じゃ——ますます、丹、丹精を抽^ひんでますで。」

「ああ、こちらの御新姐^{ごしんぞ}ですか。」

と、吻^{ほっ}として、うっかり言う。

「いや、ええ、その……師、師匠の娘でござりまして。」

「何ですな、——ねえ、……坊や。」

と、敷居の内へ……片手づきに、納戸^{そうい}へ背向^{おもて}に面を背けた。

樹島は謝礼を差出した。出^{しゅつ}来^{たい}の上で、と辞^{がえん}して肯^{かえん}ぜぬのを、

平にと納めさすと、きちようめんに、硯^{すずり}に直^すつて、ごしごしと墨

をあたつて、席書をするように、受取を——

記

一金……円也

「ま、ま、摩……耶の字？……ああ、分りました。」

「御主人。」

と樹島が手を挙げて、

「夫人のお名は、金員の下でなく、並べてか、……上の方へ願います。」

「あ、あ、あい分りました。」

「御丁寧に。……では、どうぞ。……決して口を出すのではありませんが、お顔をどうぞ、なりたけ、お綺麗になすって下さい。」

……お仕事の法にかなわないかは分りませんが。」

「ああ、いえ。——何よりも御容貌が大切でございます。——赤門寺のお上人は、よく店へお立寄り下さいますが、てまえどもの方の事にも、それはお悉くわしゆうございましてな。……お言ことばには——相好そうごう説法——と申して、それぞれの備ったおん方は、ただお顔を見たばかりで、心も、身も、命も、信心おこが起るのじやと申されます。——わけて、御女体、それはもう、端麗たんれい微妙みみょうの御面相でなければあいなりません。——……てまいただ、力、力が、腕、腕がござりましょうか、いかがかと存じまするのみでして、は、はい。」

樹島は、ただ一目散に停車場ステエシヨンへ駈かけつけて、一いきに東京へ遁にげかえる覚悟をして言つた。

「御新姐の似顔ならば本懷です。」――

十二月半ばである。日短かな暮方に、寒い縁側の戸を引いて――震災後のたてつけのくるいのため、しまりがつかない――竹の心張棒を構おうとして、柱と戸の棧に、かツと極め、極めはずした不思議のはずみに、太い竹が篠しののようにびしやつと撓しなつて、右の手の指を二本打うちみしやいだ。腕が碎けたかと思つた――氣が遠くなつたほどである。この前日、夫人像出来、道中安全、出荷という、はがきの通知をうけていた。

のち二日目の午後、小包が届いたのである。お医師いしやを煩わすほどもなかつた。が、繃ほうたい帶した手に、待ちこがれた包を解いた、

真綿を幾重にも分けながら。

両手にうけて捧げ参らす——罰当り……頬を、唇を、と思つたのが、おもて面を合すと、仏師の若き妻の面でない——幼い時を、そのままに、夢にも忘れまじき、なき母の面影であつた。

樹島は、ハツと、真綿に据えたまま、蒼白あおくなつて飛退とびしきつた。そして、両手をついた。指はズキズキと身に応こたえた。

あらた更めて、心着くと、ああ、夫人の像の片手が、手首から裂けて、中指、薬指が細々と、白く、しべ薺しべのように落ちていた。

この御慈愛なかりせば、一昨日おととい片腕は折れたであろう。渠かれは胸に抱いて泣いたのである。

なお仏師から手紙が添つて——山妻云々とお言ことば、あるいはお

戯たわむれでなかつたかも知れぬが、……しごこのあいだ、赤門寺のお上人が四五度もしばしば見えて、一定いちじようそれに擬なぞらえ候よう、御おんも許とさま様のお母様の倂おもかけを、おぼろげならず申伝えられましたるゆえ——とこの趣であつた。

——樹島の事をここに記して——

筆者は、無憂樹、峰茶屋心中、なお夫人堂など、両三度、摩耶夫人の御像みすがたを写そうとした。いままた繰返しながら、その面影つたなの影らしい影をさえ、描き得ない拙さを、恥じなければならぬ。

大正十三（一九二四）年七月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十二卷」岩波書店

1940（昭和15）年11月20日発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2008年10月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夫人利生記

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>